

# 博士学位論文審査要旨

2022年1月17日

論文題目： 書における「正統性」の生成と変容  
——趙孟頫の王羲之像（イメージ）分析を起点として——

学位申請者： 根來 孝明

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 河野 道房

副査： 文学研究科 教授 佐藤 守弘

副査： 花園大学文学部 教授 下野 健児

要 旨：

東アジアにおける書の歴史において、最も著名な書家は「書聖」と称される東晋の王羲之（303?～361?）である。しかし王羲之の原本は現存しないとされ、唐代以降は、搨摹本や拓本などの「写し」を通してその姿を想像するほかない状況が続いてきた。従来の書道史研究では、書写内容や跋文の読解、あるいは書論や王羲之伝記についての研究が圧倒的に多く、個々の作品における造形分析は十分に行われてきたとはいえない状況にある。

そこで本論文は、王羲之に代表される書における「正統性」（王羲之像）がどのように生成され、変容してきたかを、作品の造形分析に基づいて考察した。特に、王羲之の書を積極的に学んだ「復古主義者」と評される趙孟頫（1254～1322）の書を起点として論を進め、趙孟頫に見られる王羲之像の生成と変容を、彼の作品《蘭亭序》臨本、《与中峰明本尺牘》、《玄妙觀重修三門記卷》から多角的に検討を行った。さらに、そうした王羲之「正統性」が日本書道においてどのように展開したかを、江戸時代の細井広沢ら唐様作品から、三井親和、良寛まで取り上げ、和様に継承される展開を考察した。法帖や拓本の学習という観点から、その線質や字形の構造、文字群の構成を分析し、王羲之正統の伝播を論証する点は、特に注目される。さらに清朝の宋伯魯（1854～1932）や民国期の李瑞清（1867～1920）に着目し、近世から近代へと受け継がれる「正統性」を検証する。

こうした議論の展開は、時代や地域、作家の選定に多少の唐突さを感じるものの、魏晋南北朝時代の王羲之像が、近世・近代まで断続的に継承されてきたことを、文字単体や文字群の造形的分析によって検証しており、これまでほとんど例のない着眼点や分析方法は斬新で、広汎な時代や地域の広がりを含むスケールとともに、高く評価できるものである。さらに今後は、唐代と平安時代、宋代と鎌倉室町時代の作品群への広がりも期待されるものであろう。

したがって本論文は、博士（芸術学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2022年1月17日

論文題目： 書における「正統性」の生成と変容  
——趙孟頫の王羲之像（イメージ）分析を起点として——

学位申請者： 根來 孝明

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 河野 道房

副査： 文学研究科 教授 佐藤 守弘

副査： 花園大学文学部 教授 下野 健児

要 旨：

上記審査委員3名は、2021年12月28日午後3時より3時間にわたり、徳照館第一共同利用室において、学位申請者に対して、公開で口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文に関わる書道史、書論についての専門知識はもとより、中国美術史、芸術学、視覚文化論など、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行った。その結果、本論文の学術性、および研究水準の高さが確認された。

また、外国語（英語、中国語）についても、本論文の内容に関連する語学試験を実施し、十分な能力があることが認定された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目：書における「正統性」の生成と変容

――趙孟頫の王羲之像（イメージ）分析を起点として――

氏名： 根來 孝明

要旨：

東アジアにおける書の歴史において、最も著名な書家は「書聖」と称される東晋の王羲之（303?～361?）である。彼の書は唐の太宗（598～649）によって酷愛されたために、唐代以降は書家の最上位に位置付けられた。すなわち、唐代以降、現代に至るまで、王羲之は書における「正統性」の頂点とされている。

だが、王羲之の真跡は一点も伝わっていないとされ、唐代以降は搨摹本や拓本などの「写し」を通してその姿を想像する他ない状況が続いてきた。すなわち東アジアにおける書は、王羲之をその「正統性」の頂点としながらも、実態が不明瞭のままに「写し」を通して学ばれてきたのである。とはいえ、各時代の人々が思い描く王羲之の書、すなわち書聖・王羲之の像（イメージ）が一樣であるはずはなく、個々の作品には、各時代の人々が理想とした文字の姿が書き出されていると考えられる。しかしながら、従来の書道史研究では書写内容や跋文などの読解、あるいは書論についての研究が圧倒的に多く、個々の作品における造形分析が十分に行われてきたとは言えない。

本稿の目的は、王羲之に代表される書における「正統性」がどのように生成され、変容しているのかを、作品の造形分析に基づいて考察することである。とはいえ、東アジアにおいて王羲之の書を学んだと評される書家は枚挙に遑がない。そこで本稿では、特に王羲之の書を積極的に学んだ「復古主義者」と評される趙孟頫（1254～1322）の書を第1部において取り上げ、そこから論を進めることとする。

第1章で、議論の前提として、趙孟頫の書における評価の変遷を確認する。第1節で現代の記述をもとに、趙孟頫の書が一般的にどのように評価されているのか確認し、第2節で在世当時から清までの評価の変遷を確認し、趙孟頫の書が当初は高く評価されたものの、明代以降は批判的に扱われるようになることを明らかにする。

第2章で、趙孟頫が王羲之の《蘭亭序》を臨書した作品を取り上げ、どのような王羲之の像（イメージ）を生成したのか考察する。第1節で《蘭亭序》についての概要と書の複製技術について確認し、第2節で書の造形分析における主要概念として紙面構成／字形／線質を定義する。第3節で《蘭亭序》と趙孟頫の臨本を比較し、臨本は字間／行間を均質化する紙面構成を取ることと、《蘭亭序》とは異なる不均衡な字形／肥瘦のある線質を持つことを明らかにする。第4節で臨本と、《蘭亭序》原本に最も近いと考えられる唐代の搨摹本／唐代の臨本を比較し、①唐代の搨摹本よりも字間／行間を均質化すること、②唐代の臨本と共通する線質と字形を持つこと、③一部の字が点画の長さを誇張する不均衡な字形をとることを指摘する。第5節では、臨本と宋代の書を比較することによって、③が宋代の書と類似することを明らかにする。このことから趙孟頫は、王羲之の書を不均衡な字形と、唐代の臨本と共通する硬い線質が混在するものとして理解し、それを元代における新たな王羲之の像（イメージ）として生成したと指摘する。

第3章で、趙孟頫が中峰明本（1263～1323）へ宛てた手紙《与中峰明本尺牘》（以下《尺牘》）を分析し、趙孟頫の私的な場における書がどのような造形的特質を持つか考察する。第1節で王羲之の精巧な搨摹本と《尺牘》を比較し、《尺牘》の紙面構成／字形／線質は、王羲之の精巧な搨

摹本とは異なることを明らかにする。第2節で、王羲之や唐代の石碑に刻された書が拓本として流通していた当時の状況を踏まえ、これらの拓本と《尺牘》を比較し、《尺牘》に見られる線質が拓本の線と類似することと、紙面構成が初唐に制作された石碑と類似することを指摘する。第3節で《尺牘》と宋代の書を比較し、扁平で傾きを伴う字形が宋代の書と類似することを指摘する。このことから、趙孟頫の私的な場における書に拓本と類似する線質と宋代の書に類似する字形が用いられていることを明らかにし、このことが《蘭亭序》の臨書に見られた王羲之の像（イメージ）と同様であることを指摘する。

第4章で、趙孟頫が石碑原稿として書いた《玄妙觀重修三門記卷》（以下《三門記》）を取り上げ、趙孟頫の公的な場における書にどのような造形的特質があるか考察する。第1節で先行研究を整理し、趙孟頫の石碑原稿には唐代／北魏の書との類似ならびに宋代の書との類似が指摘されていることを確認する。第2節で《三門記》を唐代／北魏の書と比較し、線質の点で類似することを指摘する。第3節で宋代の書を比較対象として取り上げ、線質が共通することを指摘する。このことから、趙孟頫の公的な場における書にも、字形と線質の点で臨書／尺牘における王羲之の像（イメージ）と通底する造形的特質があることを明らかにする。

以上、第1章から第4章では、趙孟頫の書における字形と線質に宋代の書からの影響があることを明らかにし、この要素によって元代における書聖・王羲之の像（イメージ）となったことを指摘する。

第2部では、積極的に中国書法が受容された江戸時代の唐様書道を取り上げ、趙孟頫によって整齊された王羲之の像（イメージ）がどのように変容していくのかを考察する。

第5章で、江戸時代の唐様書道における先駆者とされる北島雪山（1636～1697）と、その弟子である細井広沢（1658～1736）の書を取り上げ、北島雪山から細井広沢へとどのように書風が展開したのかを考察する。第1節で江戸時代における唐様書道の大まかな流れを確認する。第2節で北島雪山の書を分析し、趙孟頫に次ぐ伝統派と位置付けられる文徵明（1470～1559）の書と類似する紙面構成／字形／線質、宋代の書に類似する線質、和様の書と類似する線質が混在することを指摘する。第3節で細井広沢の書を分析し、細井広沢は書体の別なく伝統派と位置付けられる書風を実践していることを明らかにする。以上のことから、北島雪山によって行われた唐様の書には様々な書風が混在していたが、細井広沢に至ってそれらを整理し、伝統派の書風を強めるものとなったと指摘する。

第6章で、細井広沢の弟子である三井親和（1700～1782）の《詩書屏風》を取り上げ、その造形的特質を明らかにする。第1節で先行研究を整理した上で、当時の評価を確認する。第2節で《詩書屏風》を分析し、三井親和は師の書を継承しながらも、字形／線質の上では市井で用いられていた和様の書と類似することを明らかにする。第3節で18世紀中期から後期にかけての庶民文化と唐様書道の拡大状況を確認する。このことから、三井親和の書は唐様の字形でありながら庶民文化の拡大を受けて和様的な線質となっていることを明らかにする。

第7章で、江戸時代後期の禅僧であり、王羲之をはじめとする中国の書を学んだと指摘される良寛（1758～1831）の書を取り上げ、どのような特質を持つか考察する。第1節で先行研究を整理し、第2節で良寛と同時代の書家である巻菱湖（1777～1843）の書と比較して分析を行い、良寛の書には肥瘦の変化が少ない単純な線質が用いられていることを指摘する。第3節で、従来の研究で影響が指摘されてきた《秋萩帖》と《自叙帖》を取り上げ、これらの手本が拓本であったことを踏まえて分析し、良寛の書に見られた単純な線質は拓本を用いた書法学習によって得られたものだと指摘する。

以上、第5章から第7章では、日本の書家たちが趙孟頫や文徵明などの書を「正統性」として学びつつ、線質の点で仮名の書に類似する線質を取り込むように変容していくことを明らかにする。さらに、拓本と類似する線質の書が存在することは、「写し」を通して書を学ぶことによって王羲之の像（イメージ）が変容することを示していると指摘する。

第3部では近代中国の書を取り上げる。近代中国は、石碑や青銅器の文字を手本とする碑学派が台頭した清代の影響を引き継いでおり、このような状況下で王羲之の像（イメージ）がどのように変容するかを考察する。

第8章で、清代の官僚であった宋伯魯（1854～1932）が王羲之の書を臨書した作品を取り上げ、その造形的特質について考察する。第1節で原本と臨書を比較し、宋伯魯の臨書が字間／行間を均質化しつつ字形の安定感を強めることを明らかにする。第2節で中華民国初期に活動した他の書家による王羲之の臨書作品と宋伯魯の臨書を比較し、宋伯魯の臨書に見られる造形的特質が石碑を想起させるものであると指摘する。以上のことから、宋伯魯による王羲之の臨書作品は、伝統的な石碑の書を想起させる、安定感の強い静的な造形を持つことを明らかにする。

第9章で、清末から中華民国初期に上海で活躍した李瑞清（1867～1920）の書を取り上げ、その造形的特質について考察する。第1節で現存作品を整理した上で、過剰に線を震わせる「鋸体」と言われる書風の臨書作品を分析し、線質は過剰に震えながらも、字形の点では原本よりも安定感を強めていることを指摘する。第2節で、宋代の書を手本として書かれた臨書作品を取り上げ、紙面構成が改変されていることを指摘する。第3節で、李瑞清が当時の新出土資料を手本として自らの書風を更新しようと模索していたことを指摘する。

以上を通して、王羲之の像（イメージ）は制作される時代によって、前時代の流行を受け継ぎつつ、手本とする媒体の違いによって新たに生成され、常に変容し続けることを明らかにする。すなわち王羲之の像（イメージ）は、その実態が不明瞭であるがゆえにあらゆる解釈を可能とするものであり、常に新しい書を生成するシステムとして東アジアに根付いていると結論づける。